

日本真言密教界における中世王権と「空海」 —仏教的世界観の構築と顕密主義仏教—

松本 郁代

本論文は、日本真言密教界における中世王権と中世における「空海」をテーマの中心に据え、各章ごとにテーマに関係する課題と目的を示し論を展開した。

序章「中世における「空海」と王権」では、まず、中世における「空海」の基本的性質や日本真言密教界における「空海」に対する視座を提示した。その第一は、「弘法大師」と「空海」の呼称の違いに基づく、弘法大師信仰としての「弘法大師」と真言宗「祖師」としての「空海」であり、同一人物が二つの異なる価値体系に基づく呼称を同一の意味で使用されている点を説明した。第二に、真言宗「祖師」としての「空海」は、空海入唐によって真言密教を請来したという側面を度外視された上に成立した概念である点。第三に、現在認識されている中世の「弘法大師」や中世の「空海」の意味を問い、黒田俊雄氏が提唱された権門体制国家や顕密主義仏教に相対化すべき点を挙げた。さらに、黒田氏による体制的世界観に、本テーマにおける中世の「空海」が客体として存在し得るのは、仏教的世界観の担い手として通用し得た「空海」、これらの世界観の担い手が「空海」に設定されることによって歴史が形成された、その過程における「空海」の二つであると想定した。そして、「空海」を他宗に対する日本真言密教界の独自性として捉え、本論文を展開させようとする上で、権門体制論における顕密主義仏教や、従来の日本宗教史研究との論者の相違点や批判点を挙げ、これらの根本原因に、権門体制における王権の位置が関係していることを指摘した。その解明方法の一つとして、権門体制国家における真言密教界、顕密主義仏教における「空海」の位置を各章で対比的に考察し、中世における「空海」の存在意義や必要性を、新たな宗教世界として捉えようとした。そして、全章に共通した課題として、仏教的世界観の構築と顕密主義仏教との関係を設定した。

第一章では、「日本真言密教界における真言宗「祖師」の成立—「仏教三国」をめぐる空海影像と真言八祖像—」について論じた。中世日本宗教の枠組みとして黒田俊雄氏と上川通夫氏が提示された「顕密主義仏教」と「擬似汎東アジア的仏教」の概念と視角を踏まえ、空海「御影」の成立とその意義の解明を中心に、唐から日本に真言密教を請来した空海が、日本で真言宗祖師として成立しその後「御影」の空海として中世に展開していく、その過程を各段階毎に論じた。

第一節では「真言五祖像の展開と「仏教三国」」として、空海御影の成立を「東アジア仏教文化圏」の範疇に捉え直し、日本真言密教界における空海御影の成立と「祖師」空海の相関性、空海御影を安置する御影堂の成立について論じた。「凶画」の祖師像である真言五祖像とその宗教的概念を日本に請来したのは空海であり、その後空海によって祖師の二祖が、空海の死後に空海像が加えられ、最終的に真言八祖像が成立した。唐代に空海が請来した真言密教は、日本では真言宗として成立したが、中国に聖地や高祖を持たない宗教であった。そのため対外的な祖師の必要性を促された結果成立したのが、インドに祖師が遡る真言八祖像である。第二節では「日本真言密教界の「異域」と「日域」」として、真言八祖像の成立過程を分析した。仏教伝来国としての仏教三国の世界認識が御影供祭文や表白の中で具現化されたが、日本真言密教界における宗の本質的対外意識には、真言八祖像の中でも空海影像が独立尊像化した過程で形成された、空海が密教を請来した唐代に回帰する観念的な次元での世界構造が存在していた。第三節では、「高野山奥之院と御影堂における「空海」」として、高野山に空海を安置する場である御影堂と奥之院が存在することから、各

施設や場における「空海」の意味や背景の違いを中心に論じた。高野山復興のための「解案」や「高野山参詣次第」の分析によって、空海を非公開とした奥之院と公開した御影堂は、同じ参詣ルート上に成立していたが、管理や統率組織の明確な棲み分けと、空海に対する世界観の分化が存在していたことを明らかにした。

第二章では、「慧日山における九条道家の宗教構想—顕密主義仏教と九条摂関家—」として、十二世紀以降の真言密教が後期後白河院政と共に「顕密主義仏教に最も忠実な存在」として形成されたという評価を継承し、本章では院政や宗教界支配を含む院権力に対抗し、摂関政治を一時期復活させた十三世紀初頭から半ばにおける摂関、九条道家と真言密教との関係を中心に論じた。

第一節は「真言密教界における禅定殿下」として(1)「宇多法皇の「追蹤」と法流一揆」では、九条道家が法皇初例である宇多天皇を追従し、東寺灌頂院で仁和寺の僧を戒師に伝法灌頂を受けた上に、勸修寺の僧からも伝法灌頂を受け、野沢両流の一揆を試みたことを論じた。そして(2)「禅定殿下御秘蔵本」の成立」では、道家が書写した真言密教尊法である「如法愛染法」の相伝の過程とその目的について論じた。第二節「九条家の「怨霊」と東福寺」では、道家の発病を契機に九条家を崇る「怨霊」について、比良山の天狗と道家の兄慶政とが問答した筆録集『比良山古人霊託記』を中心に分析した。九条家に発生した怨霊を、国家的次元に成立した「御霊」に対する中世的家に成立した「怨霊」と位置づけ、これらを政治権力を獲得する中世的家を循環するもう一つの政治的な宗教世界であり、これを鎮護する宗教が禅宗であったと位置づけた。第三節では、「慧日山における九条家の宗教構想」として(1)「光明峯寺と「高野旧儀」」では、「九条道家初度惣処分状」に記載された慧日山光明峯寺の伽藍構成が、高野山の宗教世界を再現したものであることを指摘し、高野山奥之院の「空海」を京近郊の九条摂関家の寺に用いた道家の宗教構想を論じた。(2)「道家一門をめぐる真言密教と禅宗」では、道家の宗教構想を通じ、九条家の家としての宗教と摂関家に関わる宗教について論じた。道家が義絶した二条良実の家が創始した即位灌頂と真言密教による王権護持との違いを分析し、摂関家の存続を図るための宗教と家の宗教の成立について論じた。

第三章では「真言密教界における「両部神道」—権門寺院と王法仏法相依—」として、「日本」の国家領域を観念的に聖別したとする皇孫意識に基づいた国土・国家像に、中世真言密界における「空海」に仮託された「両部神道」の世界観を位置づけ、従来言説上でのみ問題視されていた「両部神道」を、真言宗の権門寺院に蓄積された聖教として見直し、その必要性や存在意義を中世真言密教界と聖教が成立した時期の顕密主義仏教に求めた。

第一節「即位法と「両部神道」、(1)「東寺即位法次第」」では、「両部神道」の説である東寺観智院金剛蔵聖教の「東寺即位法次第」を翻刻し、分析した。(2)「『天照大神口決』と『鼻帰書』」では、(1)の即位法と別形式の即位法として『天照大神口決』や『鼻帰書』との内容を比較した。成立背景や担い手の違いから、これらの聖教が蓄積された寺院の王権に対する立場の違いや、アマテラスの解釈を通じた王権の意味づけを検討した。「空海」にアマテラスを対峙させ宗の正当性を主張した、中世真言宗寺院における仏教的世界像を捉え、これを王法仏法相依の限界点に成立した顕密主義仏教の言説とした。第二節では、「即位法をめぐる「帝王」と醍醐寺三宝院流」として、東寺観智院金剛蔵聖教の「三宝院嫡々相承大事」を翻刻分析し、即位法の印明は、皇統の不断継続を意味する子孫繁栄やその必要条件である安産祈祷に関わる世界観であることを導いた。中世王権の超越的権威は、印明によって創られた密教的世界観の独占的護持を期待したが、かかる世界観は両統や両朝の分立によって分化しており、それは醍醐寺三宝院流の分裂の構造と一

致したことを導いた。第三節「中世「東寺」とアマテラス」では、「両部神道」の説を国土・国家像や王権の始源へ付会した言説として捉え、これらが東寺を中心とする真言宗寺院に蓄積された意義を論じ、「両部神道」は、皇統分立期に生まれた新たな仏教的世界像であると位置づけた。

終章「仏教的世界観の構築と中世の「空海」」では、中世における「空海」の存在意義について論じた。すなわち、中世の「空海」を何らかの歴史的原動力として捉えた場合、これらは空海の生涯や空海の事跡にのみ求められるのではなく、空海の死を契機にして構築された世界観や世界像に求められるとし、それらは実在しない架空の「空海」の物語によって叙述されていても、その言説世界には当時の国家体制に対する時機即応の世界観や世界像が提示されていたと位置づけた。

そして、各章で論じた「空海」やそれを支えながら構築されていった世界観と、序章で説明した黒田俊雄氏による権門体制国家や顕密主義仏教の時代的发展段階と照らし合わせた。その上で、真言密教界における客体としての「空海」が、国王を頂点とする国家体制下における顕密主義仏教の理念と一致した本質的な理由として、第一に空海を「祖師」とする真言宗が中国に高祖や聖地を持たず、日本中心主義の宗教であった点、第二に入定した「空海」が現世の護持者として世界観や宗の専門を問わず、時機即応した尊容の獲得を可能にした多機能的側面を有していたためとした。しかし、実体を離れたところに構築された中世の「空海」は、中世的世界像を把握する一つの機軸であり、最終的な結論としては、中世の「空海」を歴史的原動力にまで引き上げた真の原動力を、「空海」の時代的独自性とそれを担った様々な階級や身分の人々に求められるとし、彼らは支配一被支配の関係性や世界観に規制された存在であるが、「空海」創出の母胎ともいうべき役割を担っており、それらを伝承や創造によって次代に伝え、これらが中世の顕密主義仏教へ発展したと位置づけた。